

私たちの文化財

No. 27

2005.11
終刊号

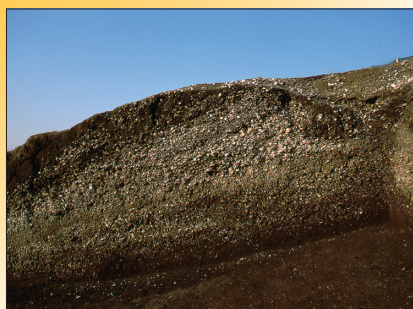


西広貝塚と縄文人の食卓

西広貝塚と縄文人の食卓

人にとって『食べる』ことは、生きるために欠かすことのできない行為のひとつです。そして人々は、長い年月をかけて、自然から食材を獲得し、加工・保存する技術を培ってきました。

では、市原市に暮らした人々は、これまでどのような食生活をおくってきたのでしょうか。今回は、西広貝塚の発掘調査でわかった縄文時代後期から晩期（約4000年～2700年前）の食卓について見ていくことにしましょう。



厚く堆積する貝層
斜面部では、貝層の厚さが2m以上に達します。

●西広貝塚の調査とその意義

ここでは、まず西広貝塚について紹介しておきましょう。

西広貝塚は縄文時代後期を中心につくられた大型貝塚で、現在の国分寺台に所在していました。発掘調査では、貝殻をすべて土ごと持ち帰りましたが、その量は大型のプレハブ建物3棟が一杯になってしまうほどでした。持ち帰った貝殻は、すべてフルイを使って水洗選別しましたが、この作業だけで約5年もの歳月が費やされました。しかし、この作業を行ったおかげで、骨角貝製品だけでも6000点におよぶ資料が見つけ出されるなど、驚くべき成果をあげることができました。

つまり、西広貝塚とは、貝層のほぼ全体が調査された、全国的にもたぐいまれな遺跡なのです。



貝殻の水洗選別作業
持ち帰った貝殻のうち、一定量は最小1mmメッシュのフルイを使い、残りは4mmメッシュを付けた電動フルイで水洗選別を行いました。

●海からの恵み

西広縄文人が利用した貝の代表的なものに、イボキサゴとハマグリがあります。いずれも、現在の東京湾ではほとんど見ることでなくなった貝ですが、縄文時代の干潟には、ごく普通に生息していた貝です。そして、これらの簡単に入手できる貝を、日常的に採取していました。貝塚があまりつくられなくなる晩期には、大きなハマグリがたくさん採られるようになります。



東京湾に生き続けるイボキサゴ（木更津市盤州干潟）
表面からわずか数cmのところに群生しているため、大量の貝を容易に採取することができます。

魚では、マイワシやマアジに代表される、沿岸の表層部を群れで泳ぐ小型魚が多く捕獲されています。また、これらの小型魚を捕食するサバやブリも見つかったので、網漁と一緒に捕獲されたのでしょう。一方、大型魚ではクロダイが最も好まれています。後

期の中頃からは小型魚の割合が減少し、晩期には淡水魚の割合が増加する傾向が見られます。

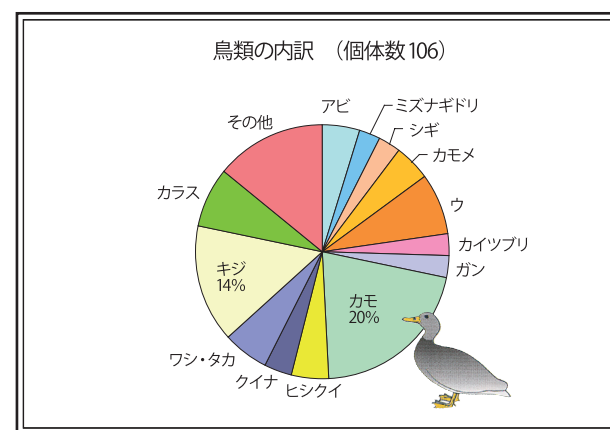
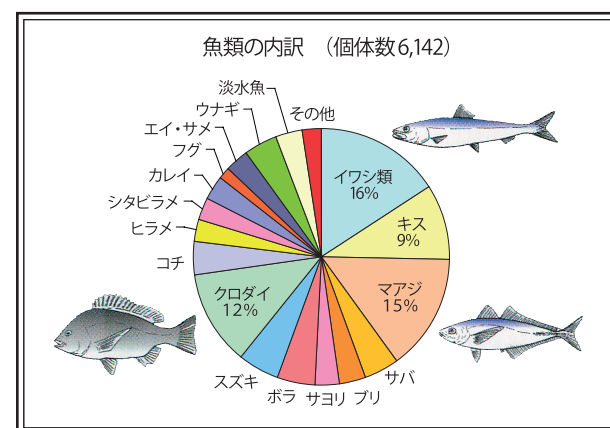
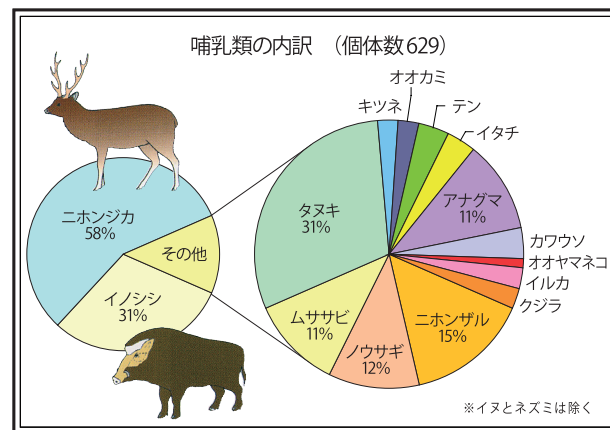
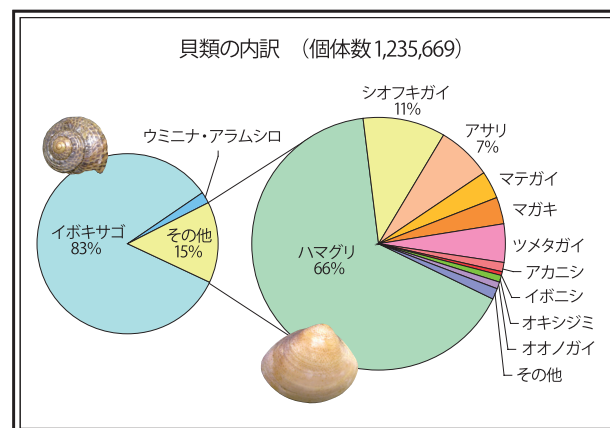


魚骨の抽出作業
1mmメッシュのフルイに残った資料の中から、小魚の骨を丁寧に拾い出していきます。

●森からの恵み

獣で多いのはシカとイノシシで、特に晩期になると、この2種を対象とした狩猟活動が非常に活発になります。小型獣ではタヌキ・アナグマ・ノウサギ・サルが多く捕獲されていますが、ムササビの割合が多いのは西広貝塚の特徴のようです。晩期になるとオオカミやオオヤマネコといった、遺跡周辺にはほとんど生息していなかったと考えられる特殊な動物が見られるようになります。

鳥ではカモとキジが多く捕獲されていますが、出土数はそれほど多くはありません。海岸や河川、湖沼などの水辺に生息する種類が多くを占めています。



西広貝塚で利用された各種食材の構成

植物質の食料は残りにくいで、具体的な数量を示すことができません。しかし、石皿・磨石や打製石斧の出土から、ドングリなどの堅果類やヤマイモなどの根茎類を利用していたことが考えられます。また、住居の炉からは炭化したオニグルミやトチノキの殻が出土していますし、建築材や燃料材として利用されたクリやコナラ類が見つかったので、当然これらの木の実も利用していたことでしょう。



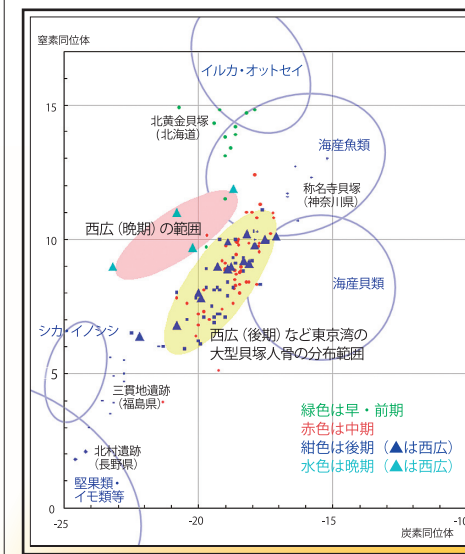
埋葬された30歳の男性人骨
貝塚からは、丁寧に埋葬されたヒトやイヌの骨がしばしば見つかり、さまざまな情報を提供してくれます。

●人骨が語る食生活

ここまでは、西広縄文人が利用した各種の食材について見てきました。では、彼らはこれらの食材をどれくらいの割合で利用していたのでしょうか。この疑問を解明する画期的な方法が、『同位体食性分析』です。これは、食物を通してタンパク質が骨に蓄えられる特性を利用したもので、人骨からタンパク質（コラーゲン）を取り出して、その中に含まれる炭素（¹³C）と窒素（¹⁵N）の濃度の割合と、各食材に含まれる炭素と窒素の濃度の割合とを比較することで、その人の食生活の傾向を推定するというものです。

右の図は日本各地の縄文人骨を分析したのですが、北海道の縄文人はオットセイなどの海獣類、長野県の縄文人はドングリなどの植物類というように、特定の食材

に強く依存していたことがわかります。これに対し、西広貝塚をはじめとする東京湾沿岸地域に暮らした縄文人たちは、植物・獣類・魚貝類のいずれにも偏ることなく、集落の周辺で得られるさまざまな自然の恵みを、バランスよく利用していたことがわかりました。



各地の縄文人の食性

後期と晩期で食生活に大きな変化が見られます。性別や年齢との検討で、もっと多くのことがわかるかもしれません。

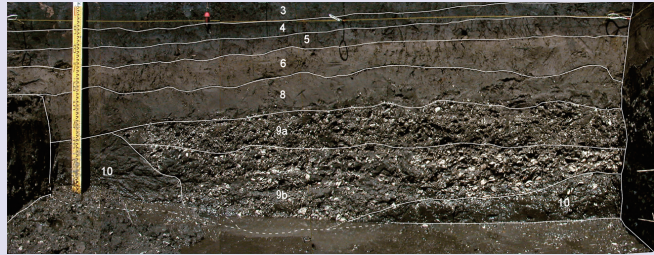
最近の発掘調査から

市原条里制遺跡 - 海岸部の貝塚 -

菊間地区から国分寺台につづく台地と、八幡・五井の市街地に挟まれた場所には広大な水田地帯が広がっています。この地にある市原条里制遺跡^{いちほらじょうりせい}で、縄文中期中ごろ（約4,500年前）のものと推定される貝層を発見しました。蛇崎八石^{しやまきはっせき}という地区で、平成16年4月に数日間調査をした成果です。

貝層には比較的多くのクルマシ・ドングリと少量の骨（タヌキ、カモ、エイ、キス、アジ、アユなど）が見つかりました。貝はイボキサゴが最も多く、カワザンショウガイとハマグリも多く見られます。イボキサゴとハマグリは、縄文人が好んで食材としたおいしい貝ですが、カワザンショウガイはアシなどに付着して当時この場所に棲みついていたものです。

当時、東京湾沿岸には巨大な貝塚をもつむらがたくさんありました。市内にある草刈貝塚と山倉貝塚はこの時期を代表するむらで、たくさんの人が定住していました。遺跡の位置はこの時期の海岸にあたり、イボキサゴ漁、ハマグリ漁、小魚の網漁が活発に行われた漁場であったと考えられます。今回発見された貝層の内容から、漁場に向かうアシが生えた湿地で、貝を加工したり、食べたりしている光景を思い浮かべることができます。



掘り出しもの紹介

骨製垂飾品

西広貝塚／縄文時代



縄文時代後期中頃の貝塚から出土したもので、ツキノワグマの指の骨が使われています。指の先端側には横方向に穴があけられ、吊り下げられるようになっていますので、ペンダントとして使われていたようです。

内側面には、横方向に3本の溝が彫りこまれ、全体に赤い顔料^{かみりょう}が塗られています。

これとうりふたつの製品が、千葉市の加曽利南貝塚から出土しています。県内の貝塚から出土するツキノワグマは、加工が施された犬歯や骨の一部しかありません。また、他の山々から孤立している房総丘陵^{ぼうそうきゅうりょう}には、クマは生息していなかったと考えられますので、これらの製品は山間部から運び込まれたものと考えられます。ツキノワグマは本州に生息する最大の陸上哺乳類ですので、狩猟民でもある縄文人たちは、クマの持つ力に対して何らかの特別な価値を見出していたのかもしれない。

●今回紹介の遺跡●



お知らせ

◎文化財センター 解散のお知らせ

財団法人市原市文化財センターは、平成18年3月31日をもって解散することになりました。来年度からは、市の機関「市原市埋蔵文化財調査センター」が業務を引き継いで行います。20年にわたる皆様からのご支援に深く感謝致しますとともに、今後とも、地域の文化財保護に対するご理解を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



No.27 2005.11

財団法人
市原市文化財センター
〒290-0011
千葉県市原市能満1489
Tel: 0436-41-9000
Fax: 0436-42-0133